

「見えた現実」と「支える力」

岐南町立岐南中学校3年 加藤 柚空

「税金は人々の生活を支えるために使われている」そう聞くと、安心で温かいイメージがあるかもしれません。けれど、私が中学二年生の秋に見た被災地の光景は、そんな理想とは大きく違っていました。

その年、私は石川県の震災、土砂災害の被災地を訪れ、現地の中学生や介護施設のご高齢者と交流する機会がありました。復旧が進んでいると報道されていたけれど、道中目にしたものは、傾いた電柱や壊れた家、ひびが入り盛りあがった道路、道路が土砂で通れない状態、草木がのびて荒れている光景です。訪れた中学校の建物には、亀裂がはいり、コンクリートの階段が割れていて危ないと感じました。災害にあった時にあると良いものを尋ねたら、状況にもよるけれど、倒壊してしまった時に木材を切るため、「家にチェンソーがあると、とても助かるから良い」と同学年の子が教えてくれたのは、とても驚きました。また、施設でお話したおばあさんは、住んでいた家が全壊してしまい、親戚の家で暮らしていると話してくださいました。倒壊や水が止まってしまい、運営できないお店も数多くありました。そんな状況の中でも、みんな明るく元気でした。「支え合って、日常に感謝して過ごしている」私は心がギュッと締め付けられたのを今でも覚えています。

こうした光景を目の当たりにして、「税金は本当にちゃんと使われているの?」と疑問に思いました。災害復旧や福祉の現場などには税金が使われています。税金は、人の命や暮らしを守るためにあるはずなのに、手続きや予算の関係、使い方や優先順位を間違えてしまうと、必要な場所や、本当に困っている人たちに届かなくなります。それが現実だと思いました。

これまでの私は、税金と聞いても「高くなるな」「大人が払うもの」と思うくらいで、深く考えることはませんでした。けれど被災地や、支援が間に合わず困っている人たちを見て、税金は「ただ集めればいいもの」ではなく、「正しく、必要なところに使われてこそ意味があるもの」だと考えるようになりました。

今はまだ、社会の仕組みを学んでいる途中です。この経験を通して、どんな情報も鵜呑みにせず、自分の目で見て、感じて、考えることの大切さを学びました。そして、私も将来働いて納税することになります。その時私は、ただ義務として払うのではなく、「これは、困っている人を支えるお金だ」と信じて払える社会であってほしいと思います。例えば、通学路の整備や学校の図書、救急医療など、私たちの生活のあらゆる場面に税金が関わっています。そうした身近な部分にも意識を向けながら、税金の役割を学び続けたいです。そして、自分の身の回りの出来事に关心を持ち、未来の社会づくりに少しでも役立てる人になりたいです。